日蓮の真実

混迷する現代の闇を開く鍵

小林正博

第三文明社

はじめに　1

第一章　生活と人生にいきる日蓮の心

「日蓮」の命名に込められた意味　11
心の財第一　15
逆境こそ成長の因　18
方法論にたよるな　25
目先の利に心を奪われるな　29
自らが手本を示す　36
同苦する（南条時光の母への手紙）　43
退転者の心理　53

身体と心　60

第二章　日蓮仏法に脈打つ「仏法の真髄」

万人に開かれた「日蓮の仏法」　69
唱題の姿勢　73
菩薩の心　78
「開目抄」の心　86
発迹顕本の心　90
現世の信心こそ第一　98

第三章　門下の育成にみる「師の心」

師の指導を伝える　105
生涯師とともに　108
「孝」の心　118

門下を思う心　130
日蓮の女性信徒観　133
師弟の連携　144

第四章　「その生涯に貫く「日蓮の心」」

生誕　151
誓願と出家　152
修学　153
立教開宗　155
唱題行の創唱　156
謗法弾呵　158
天変地異　161
松葉ケ谷の法難と伊豆流罪　163
竜の口の法難　165
末法の正師への自覚　169

鎌倉から身延へ　172
門下の育成　176

第五章　現代にいきる「日蓮の心」

日本人の宗教観　183
生きるための宗教　189
政治を監視せよ　194
歓苦の人生哲学　203
ふるまいこそ出世の本懐　209

引用文御書頁順索引　221

す。心構えと実践さえ伴えば、だれでも幸せをつかめるという日蓮の心の原点に立ちかえるべきなのです。

唱題の姿勢

唱題の実践は、願いをかければなんでも叶うというような御利益信仰のためにあるのでも、苦しみからのがれたい一心で助けを求めるというようなおすがり信仰のためにあるのでもありません。それではずいぶん身勝手で調子のいい信心利用になってしまうのです。そのために日蓮が唱題行を説き、本尊を顕したとするのではかえって日蓮の心から離れた信仰とならざるをえません。

むしろ悩み、苦しみと戦い抜き、打ち勝って自分の境涯を開いていくために信仰があるのです。そのためには勇気をもって壁にぶつかることが肝要です。勇気は勝利の前提条件です。挑戦する勇気なくして、苦難との戦いは始まりません。日蓮の書簡を

読むと勇気ある信心を強調していることがわかります。「ふかく信心をとり給へ、あへて臆病にては叶うべからず候」（一一九三頁・一六八六頁）と、悩み、苦しみが深ければ深いほど、弱気になりがちですが、打ち勝つために真剣な唱題を実践することにより、ふつふつと挑戦への勇気が湧き上がってくるのです。

日蓮は「師子王の心」ということもくりかえし強調しています。「師子王は百獣にをぢず・師子の子・又かくのごとし」（一一九〇頁・一六七四頁）という百獣の王・師子はその勇猛さにおいては他の追随を許さない王者の風格があります。「師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮の如し」（九五七頁・六一二頁）とも述べています。そのようなものをも恐れない勇猛な師子の姿を信心になぞらえて、勇猛精進の信心こそが成仏の直道だといっています。とても越えられそうもないような大きな壁が立ちはだかっていても、師子王のような勇猛果敢な心がまえを持続してはじめて人間としての勝利の実証を示せるのです。

唱題がもたらすものは勇気だけではありません。勇気は打開の第一歩であって、そこから目の前の壁をどうすれば乗り越えられるのか。乗り越えるためにはどういう行

動をとればいいのか、という智慧が湧いてくるのです。

仏法では六波羅密という菩薩の修行を説いています。布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六つですが、智慧がいちばん最後にあります。だから仏法で説く智慧は世間的な知恵ではなく、菩薩から仏への最高境涯へ通じる成長への実践の道なのです。唱題を通して湧き上がる智慧と、経験を通して考え出した方策では大きな違いがあります。

ともに難局を前に懸命に打開に向けて行動する点では同じに見えますが、智慧には菩薩の心が通っていなければなりません。自分を苦しめている壁が人である場合、それを揺り動かすものは心ある対応に尽きると思います。言葉巧みに相手を説得して難局をしのいでも、それは一時しのぎにすぎません。一難去ってまた一難、同じような苦しみにあえぐことがくりかえされることになります。

心が通じれば相手も心の扉を開く。実に菩薩の実践における智慧は、相手にも菩薩の心を引き出すことができるのです。その意味で唱題は落ち込み悩むせまい境涯から菩薩の心を湧きださせて、難局にぶつかっていく広い境涯をもたらすのです。

「末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」（一〇二二頁・一八六四頁）というとおり、みずからのためだけの唱題ではなく、人のためにも祈っていくことが強調されているのです。

これは他力本願の心とはまったくちがいます。他力本願とは自分の非力を認めるあまり仏の力にすがる姿勢をいいます。それでは人間としての成長は望めません。難局を越えるのは相手の出方次第、すべては相手が変わってくれるかどうかだ、などというのもある意味で他力本願です。

境涯を広げゆく唱題行の姿勢を忘れてはならないのです。自行化他の自行とは自身の成長のための実践をいいます。解決に向かって智慧をしぼり出すのはあくまでも自分です。相手をかえるのは自分なのです。そのためには自分が変わることが前提です。自分をより広い境涯へと変革していく、そのための唱題だといえるでしょう。

また、日蓮は願いが叶う信心には四つの条件が必要だとして次のようなたとえをあげています。

「譬えば高き岸の下に人ありて登ることあたはざらんに又岸の上に人ありて縄をおろ

して此の縄にとりつかば我れ岸の上に引き登さんと云はんに引く人の力を疑い縄の弱からん事をあやぶみて手を納めて是をとらざらんが如し争か岸の上に登る事をうべき、若し其の詞に随ひて手をのべ是をとらへば即ち登る事をうべし」（四六四頁・二七九頁）

高い岸の上に登ることは成仏を指していますが、到達するためには頂上にいる人がなわをしっかりと握って放さないことを信じ、なわも絶対に切れない強さをもっていることを信じる、あとはなわを頼りに自分の力で登っていく、それらがそなわって頂上に登ることができるといっているのです。これは頂上にいる人（仏力）と、なわ（法力）を信じて（信力）登る（行力）ことによって頂上に達する成仏への四つの条件――四力を例えているのです。

仏力と法力はある面では他力ということもできます。信力と行力は自力といっていいでしょう。その意味で四力を条件とする日蓮仏法は、自他共力の宗教ということができるでしょう。本尊（仏力）と妙法（法力）を信じて（信力）唱題（行力）する時、四力が具足して所願満足となるのです。

師子王のような勇猛の心を引き出す唱題、自行化他にわたる唱題、四力具足の唱題であれば祈りは必ず叶う、すべては唱える側の姿勢にかかっているのです。

菩薩の心

鎌倉時代、基本的な上下関係は「主従」や「親子」があったわけですが、「主」には所領や恩賞（御恩）を受けていたことに対して忠（奉公）の道を貫き、「親」には育ててくれた恩や所領を相続されることに対して孝の道を貫くというのが人としての生き方でした。

しかし、人間というのは、そのような尽くすことによって対価を得るというような世俗的な人間関係ではなく、もっと純粋に利害を越えた人間関係にどこかあこがれているものです。それこそ宗教的な「師弟」関係だったと考えるのです。当時の人々は今もそうですが、言い知れぬ不安を抱きながら日々の生活を過ごしていました。

鎌倉武士やその女房たちは、余生を仏門に入って来世を期すというのが通途の生き方でした。その導き役の師僧を見つけ、法名（あるいは法号ともいう。死後戒名ではなく生前にもらう）を授かり、その指南に従って人生の総仕上げをしようというものでした。だからこのような「師」は、「主」や「親」とはちがい目に見えない「心」の安心と常住観を満たしてくれる存在だったのです。職場の「主」とも家庭の「親」とも違い、師僧は、いわば「人生の師匠」そのものだったのです。その「師」に対して、余生の生き方の指南を受け、報恩の代償として供養を届けるという関係で成り立っていました。ただその風習はかなり形式化し、どこまで師僧に全幅の信頼を置いていたかは疑問です。

師僧の存在意義は不安を払い安心を与える「仏」と、無常を破り常住を説く「法」を明示するところにあります。「仏」と「法」に通達した、聖の世界と俗の世界とを結ぶ存在だったといえます。

当時の人々の間で広まっていた「仏」と「法」は、現世の安穏のためには「大日如来」と「真言祈祷」が、入道や尼になると来世の往生極楽を期すために「阿弥陀仏」

と「念仏」が信仰の主流になっていました。

また新来の禅も主に武家社会の中で信仰されていました。真言僧、念仏僧、禅僧などが師僧として崇められていたわけです。

しかし、これらの師僧たちは幕府やその有力者をパトロンのようにして、聖世界の切り売りのようなことをしており、「主従」や「親子」関係と次元の変わらない「師弟」関係の世俗化が進んでいました。権力便乗、権力依存、もっといえば師僧自身が幕府の宗教的職掌を担う御家人と化していた時代だったのです。

おそらくこのような社会背景が、鎌倉時代、歴史に名をとどめる各宗の祖師たちの出現につながっていったのだと思います。その中で日蓮の生き方は、あるべき師僧のとしての条件を十分に備えていたのです。「仏」と「法」に通達する条件の面から言えば、日蓮は帰依の対象をそれまでないがしろにされがちだった「釈迦」と「法華経」であると主張しました。

ここでむずかしい議論になりますが、この「釈迦」と「法華経」を立てるのはあくまで日蓮の思いの中では相対的な勝劣のために、あるいは人々の仏教受容の理解度に

合わせた方便として主張されたものだと思うのです。

つまり当時主流であった「大日如来」や「阿弥陀仏」などに対する「釈迦」と、「密教」や「浄土経典」などに対する「法華経」を提示して、優劣の上から「仏」と「法」を論じたということです。

しかし、日蓮は「さどの国へながされ候いし已前の法門は・ただ仏の爾前の経とをぼしめせ」（一四八九頁・一四四六頁）というように、佐渡期以後は「本尊」（日蓮自筆の曼陀羅）と「南無妙法蓮華経」への教導に本意をおいているのです。

いずれにしても人々を成仏に導く「仏」と「法」を覚知した師僧としての条件を満たして日蓮は、まず「釈迦」と「法華経」の宣揚の途に立ちあがったのです。

しかし、日蓮の説法を聞いた人々は、どうして師僧として日蓮を迎えたのか、これだけでは説明がつきません。日蓮の門下に連なるということは、それまでの師僧を替えるという思い切った決断が必要です。いったい門下は日蓮の何に魅力を感じ、入信を決意したのでしょうか。

幕府からにらまれ数々の迫害を受けても、日蓮を人生の師として信順していった多

くの門下が輩出した秘密は一体なにか。

それは現代的に言えば、目の前の人のために尽くす、そのためにはどんな労力をも惜しまないという相手を思う一念の強さが人々の心を動かしたのだと思うのです。

人間関係の基本は、まず自分がいて他人がいるという「自他」の区別からものごとは始まるものです。あくまで自分の人生ですから「自分」が中心であることは当然であり、「自分」に対して「他人」が何をしてくれるのか、何をしてほしいのか、と考えるのが普通でしょう。ところが日蓮の場合は他人より自分を優先するということがほとんど感じられないのです。つまり自分はこうしてあげるから、あなたは自分にこうしてほしいというような授受関係で接してはいないのです。あえていえば「与え尽くす」ことに徹しているのです。

まさにそれは仏法でいう「慈悲の心」が行動としての「菩薩道」に現れた生き方といえます。菩薩のふるまいは利他、すなわち他を利することにあります。それは大乗仏教の精神そのものです。日蓮は「菩薩」について「六道の凡夫の中に於て自身を軽んじ他人を重んじ悪を以て己に向け善を以て他に与えんと念う者」（四三三頁・一七

八頁）と定義付けています。

現代の私たちにとっては、なかなかこうはいきません。自分のために他人がある。自分の幸せのためには他人は二の次だ。いいことは自分に、悪いことは他人に。まるで鬼は外、福は内です。でもこれが人の世の常なのかも知れません。

それでもこのような菩薩の生き方は、心の中では自分もそうありたいと誰でも思っているのではないでしょうか。その菩薩の実践を貫いている人が現実に目の前に現れたら、驚嘆し感銘を受けるでしょう。門下にとって日蓮という人は、まさにそういう人だったのです。それは従来の師弟観を破るような衝撃的な出会いでした。師に尽くす弟子というより、弟子に尽くす師のふるまいを通して、門下の人々は人間としての生き方を日蓮から教えられたのです。そういう師だからこそ、師弟のきずなは強く、共戦の決意を固める本物の弟子が育っていったのです。

人は利害を越えて自分のために真剣に相談に乗ってくれる人、動いてくれる人には心を開くものです。作為というものが微塵もない菩薩の一念は、相手の心の奥深く貫く力があるのです。意識せずに「自身を軽んじ他人を重んじ」る心のあり様が備わっ

ていた日蓮の境涯の高さが伝わってくるようです。

そのような利他に徹する日蓮の作為のない言動は、どこから生じていたのか、これを知ることも現代に生きる私たちには大きな関心のあるところです。

瞬間、瞬間を巡り来る苦悩の中で生きる私たちには一時的な菩薩道の実践はできても永続することは難行中の難行でしょう。

しかし、日蓮はそれを貫いた。なぜか。その心の奥底を探るのにヒントになる法華経の経文の一節があります。「不自惜身命」（自ら身命を惜しまず・寿量品）「我不愛身命但惜無上道」（我身命を愛せず但だ無上道を惜しむ・勧持品）がそれです。

自分の命を軽んじるというのは誤解を招きやすい表現ですが、人の命は仏法によって生かされており、仏法への信順、帰命こそが命の生かしどころととらえるのです。また法華経ではありませんが「身軽法重」（身は軽く法は重し・章安の「涅槃経疏」）、「死身弘法」（身を死して法を弘む・同）という一節もあります。法のためにわが命を、人生をかける。日蓮の仏法への態度はそこまで徹底していたのです。

もとより人の命は軽いはずはありません。「命をば三千大千世界にても買はぬ物に

て候と仏は説かせ給へり」（一〇五九頁・一六五四頁）、「一日の命は三千界の財にもすぎて候なり」（九八六頁・八六三頁）また「いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり」（一五九六頁・一二六一頁）と命の大切さは、日蓮がくりかえし強調するところでもあります。

それこそ現代的にいえば、地球の重さよりも重い一個の生命なのであり、生命の尊厳は日蓮仏法の骨格をなしているといっても過言ではありません。

「人間に生を受けて是れ程の悦びは何事か候べき」（九三七頁・一二三六頁）ともいっています。しかし、せっかく人間として生まれても、命を惜しむあまりに人生を誤ったり、つまらないことで命を失うのであれば、これほど空（むな）しいことはありません。大事なことは命の使い道、つまり使命の置きどころにあるのです。

日蓮ははっきりと言い切っています。「世間の浅き事には身命を失へども大事の仏法なんどには捨る事難（かた）し故に仏になる人もなかるべし」（九五六頁・六一一頁）と。これは当時の普通の人が考える人生観とはかなり違ったものでした。それは宗教的な人生観の究極をさし示しているといってもいいでしょう。

そして、日蓮の偉大さはその考えを貫き通したところにあります。「命限り有り惜(おし)む可からず遂(つい)に願う可きは仏国也」（九五五頁・五一七頁）、「命を法華経にまいらせて仏になり給う」（一二九九頁・二五二九頁）等々、「法」に生きる生涯こそ、真に「命」を生かす人生ととらえたのです。

行動の原点にこの人生観を据えていたからこそ、「自身を軽んじ他人を重んじ」る菩薩道の実践は、自然の発露(はつろ)として作為なしに人々に接することを可能にしたのです。根源的な衆生救済の法を覚知した日蓮の生命の使いどころは、「死身弘法(しんぐほう)」そのものだったのです。

日蓮の魅力は、このようないままで出会ったことのない人生観を、真剣に確信に満ちて他意なく語り人に接するふるまいにあったといえるでしょう。

「開目抄」の心